

望と期待とから、平凡な生活のあらゆる部分に互つて分拆が試みられた。新しい方法と云ふのは端的に云へば比較することであつた。諸國の郷土生活のうちに傳承される夥しい事實に就いて、彼此比較することによつて前代の生活の意味を汲みとるのであつた。かくすることによつて歴史は縦のあり方から更に横の構造に於いても把握される様になる。

たとへば食制つまり食べ方に就いても、かう云ふことが歸納される。食べ方は口へ持つて行く一種しかない様なものであるが、實は變化があつて、通例は家内限り、或時には他人を喚び又集まつて食べ、食べる時と處とも定つた約束があり、多くの食品はそれぞれに或食制を伴うてゐると云ふことが。以前は共同飲食が食事の常の姿であつたのである。これには食物に或精神的な力を考へ、これを共にすることによつて、共同の生活の幸福と利益とを保障しうると考へたものであつた。さうした事實は豊富に集められてこの書のうちにある。たゞこれらの零細な資料からこれまでに説き明めたのは何と云つても先生の力であつた。

われ／＼はたゞ徒らに鼓腹して楽しむものではない。食物も腹を満す物質のみではない。栄養學の教へるところをもつて簡単に調理しきれものではなかつたのである。たゞカロリーの計算やビタミンの適合ばかりでは消化しきれないものであつたと云ふことを、これらの文章を咀嚼することによつて玩味しなければならぬ。先生の與へられたところは決して豪華な食卓であるとは云へないかも知れないが、われ／＼を慈しみ育くむ老家刀目の温い

心づくしの膳部であつて、材料は皆家のうちにある。出前仕出しの類は斷じて加つてゐない。それゆゑわれ／＼は安んじて身の養ひとしてこれに向つて座ることが出来るのである。

(目次)

食物と心臓。米の方。生と死と食物。モノモラヒの話。酒もり鹽もり。身の上餅のことなど。トビの餅・トビの米。餅なほらひ。午餉と問食。幸福の木。田作りまな祝ひ。のしの起源。食制の研究。

(創元選書第四十五、一圓五〇錢) (平山敏治郎)

鸞 鳳 帖

小林 正 直編輯

近時宸翰に關する關心が急角度の上臈を來し、多くの文化史展は宸翰を中心とするかの感があり、多くの蒐集家は萬金を投じても宸翰を手に入れんと努力するに至つた。宸翰に對する此の傾向は、一應、覺ぶべきものであらう。

鸞鳳帖は在東京の小林正直氏が蒐集された宸翰四十四點に加ふるに皇族の御筆になる御消息御短冊を以てし、附するに國寶に指定された榮華物語、重要美術品に指定された歌切等、すべて七十九點を玻璃版として上梓頒布せられたものであり、別に、これに就いての讀本を一冊添へられたのは、親切な心遣である。

小林氏はもと洛北修學院離宮の附近に生れられたが、従つて祖先以來皇室に對し奉りては特別の忠誠を致された家柄であつた。

それ故に、氏は尊皇と愛郷との熱意から、早くより宸翰の蒐集・保存、それによつて歴代御聖德奉仰を念とせられた。今やこの一部を印影に附し、親戚知友に頒ち、以て皆人とその素懐を俱にせんとせられたものが本書である。

收められる所、伏見天皇宸翰廣澤切、後小松天皇宸翰御消息以下室町時代から江戸初期に互れる歴代のものが多く、曼殊院門跡に宛てられたものが大部分であるから、その尙藏された所も大體に見當が付き、それだけ史料としての價值高きものがあらう。

皇紀二千六百年の佳歳に當り、かゝる意義深き秘寶の公開された事だけでも結構な事であるが、更に、これらの史料によつて皇運隆昌の御次第を偲び奉る事が出来るのは、洵に光榮であると思ふ。(非賣品)(中村直勝)

江南文化開發史

岡崎文夫・池田靜夫著

支那江南の文化が宋代に至つて急速に發展したのは、「この地方に於ける農業生産力の發達」に基因する。従つて該地の「水利水運の發達はその(江南開發の)最も重要な條件の一」であるとの見解に基き、「文獻上よりの推定を實地に見て確めんとする」必要を痛感した岡崎博士及び佐々學士は昭和十一年夏、文部省學術振興會の命を受け、江南水運の状態を視察して歸學し、佐々學士助手) 沢職のため、之に代る池田助手と共に、主として江南の水利水運問題の中心たる松江(吳松江)の研究を大成し、「總説」及び「要

略」に於て博士がその平生研究されたる結果を發表し、「別説」に於て、池田學士の諸論文を一括して合著として世に問うた勞作がこの江南文化開發史―その地理的基礎研究―である。

第一編「總説」に於て博士は先づ「江南」の定義を與へて「南京を中心とする地方」を「南部江蘇及び浙江の一部を含む」地方として次に古代より唐代に及ぶ江南の湖澤と河流との變遷を述べ、豊富なる水流を運河に利用する交通政策と、治田の爲めの灌漑政策とが古くから採用されたが、然し戰國以來國家の運河政策はむしろ農田の開發よりも漕運の爲めの交通路が重視された事に注意された。第二編「別説」に於いて池田氏の第一章「唐宋時代の三江學説の一理解」は禹貢に見ゆる三江の説が唐宋時代に於いて、學説の歴史より見て異色のあつた事を指摘し、その原因に就いて興味ある一説を展開し、結局三江は太湖下流の松江上の三江口説をとるが、これが宋代、時に南宋時代に於いて顯揚されたのはこの地方の農業の發達と密接なつながりを持つてみた結論する。次いで第二章「銀林河考」に於ては太湖の水源としての銀林河(中江)を繞つて、北宋時代に對立した五製復活論派(水利治田論派)と坪田提唱派(交通論派)との所論を紹介し、唐宋時代時代に太湖は上流より長江の流れを受けなくなつた事實を指摘し、これが太湖に及ぼす影響と、更に太湖周邊の地域がそれによつて受ける影響とに注目し、徽宗時代の水運問題を論じた後、南宋時代は首都を臨安に奠めた關係上、銀林河利用の問題は水學として愈々發展し、結局銀林河開發は實現しなかつたが、銀林河は長江流域と臨安と